

ゼロ・プロセス Zero Process とは？

人は、戦争や大量虐殺、原子爆弾の爆発や地震・津波・洪水などによる町や家族の喪失、性被害などのところが押しつぶされそうになるような圧倒的な体験をすると、心が機能しなくなり、“ゼロ・プロセス zero process”に陥り、解離や転換症状が生じ、続いて否認、分裂、抑圧などの防衛機制に引き継がれる。そして被害者は幼いほど、その結末は厄介なものになると言われる。この“ゼロ・プロセス zero process”はジョセフ・フレナンド*によりトラウマ状態を深く理解する試みとして提唱された。“ゼロ・プロセス zero process”が鍵概念であるのは、圧倒的な状況の中では実際に起きたとおりに経験を処理する力が欠如しゼロになるからである。例えば1次過程(プライマリー・プロセス)の置き換えや圧縮とは対照的に、中身は凍ったまま、それ以上動くことも処理されることもないまま残る。彼は、フロイトの意識的な思考活動やコミュニケーションと同等の2次過程(セカンダリー・プロセス)および無意識レベルの防衛的1次過程という学術用語に、圧倒的なトラウマで起きる“ゼロ・プロセス zero process”を加えたのである。受けたトラウマが強く圧倒的であると、意識の世界に置いておくことはできない。そのため記憶は、その人自らがその体験に触れることはなく、心のより深い無意識の世界の中で封印される。

『ヒロシマを生き抜く』Death in Life で有名なリフトンは、被爆後17年経った1962年、被爆者の実態調査をした。その著作の中で、生存者が示す慢性的な反応として『生きながら死んでいる状態』を見出し、それを精神的麻痺(Psychic numbing)と名付けた。そしてこの心理的プロセスは死との遭遇体験と密接な関係を持っているという点でトラウマの根本的問題であるとした。2011年の東北大震災の場合でも、震災や津波そのもののみならず、次から次へと生活が破壊され、破壊の連鎖反応が起き、無力感に打ちひしがれた生存者たちがいた。原爆生存者や大震災・大津波の生存者は、そのトラウマがあまりにも圧倒的なために、体験したことが意識レベルに上ることなく、思い出されることもなく、対処し難いものになる。精神的麻痺は、トラウマ体験の処理されない心理過程という意味で、“ゼロ・プロセス zero process”と共通項を持つ概念と考えられる。

この11月に東京で開催される、第4回世界乳幼児精神保健学会 日本支部 学術集会にてカナダの精神分析家・精神科医、キャスパース・チューターズ先生が、『トラウマが子どもと家族に及ぼす影響～ゼロ・プロセスとは～』と題するお話をされることはとても意義深い。先生は、ご自身が8歳のとき、ラトビア難民となり、家族とともに祖国を追われ、カナダに渡った体験を持っておられる。その体験に根差し、先生は長年にわたり、子どもが被ったトラウマとその後のパーソナリティ形成への影響について、人はどうトラウマを生き抜くかと

いうテーマを研究し続けておられる。先生は、2013年広島、2016年東京、このテーマについて取り上げ、幼少期に受ける重大なトラウマは、未処理のまま凍結され、恐怖や回避、信頼感や安全感の欠如、傷つきやすさとして表現形を変えて顕在化し、次世代に、さらにその後も次世代に伝達されると警告した。そしてこの凍結されたトラウマを溶かすためには、それを語り、徹底操作するための試みがなされなければならないと訴えてきた。

このゼロ・プロセスを知り、理解し、ケアを必要としている人たちに適切なケアをする重要性を声高に主張し続けることこそ、精神保健従事者としての私たちの責任であると考え

*K.チューターズ. トラウマの連続性にどう対応するか:世代を超えた課題として.

講演. FOUR WINDS 乳幼児精神保健学会第16回学術集会広島大会. 2013

*K.チューターズ. トラウマの連続性にどう対応するか:世代を超えた課題として.

FOUR WINDS 乳幼児精神保健学会誌.Vol.7 2014

*K.チューターズ. 子どものトラウマと心理発達～子ども時代の根拠体験とそのパーソナリティにおよぼす影響～. 講演録. 慶応義塾大学病院小児科学教室 精神保健班講演会 東京 2016

*Fernando, Joseph.(2009) Processes of Defence: Trauma, Drives and Reality -A new Synthesis. Lanham, Md: Jason Aronson.

*Lifton, Robert. (1968) Death in Life: Survivors of Hiroshima. ヒロシマを生き抜く(下)精神的麻痺(Psychic numbing) 榎井・湯浅・越智・松田訳 岩波書店 p 326-349